

琉球大学学術リポジトリ

「鼓くらべ」（山本周五郎）の「読みの術語」 — 「文学読解観点論」による生徒レポートの集成—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 糸数, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8009

「鼓くらべ」(山本周五郎)の「読みの術語」

—「文学読解観点論」による生徒レポートの集成—

糸 数 剛*

(1994年8月1日受理)

「文学読解観点論」とは筆者が構築した読解の理論で、文学読解の定義を「文学を対象として醸成される知的概念を言語化すること」とし、文学を対象として醸成された知的概念はすべて文学読解の材料とする。文学を対象として醸成された知的概念は、文学についての観点である。この観点をとらえ、とらえた観点を言語化することを文学読解の作業とする。ここで言語化する際の特徴として術語を用いることがこの論の独自性である。ここで用いる術語は、既存の術語も用いるが、ネーミングによって柔軟につくり出していくこともよしとする。

このような文学読解に関する理論と方法を「文学読観点論」とよぶことにする。この活動で用いる術語を「読みの術語」とよぶ。「読みの術語」のうち、ネーミングによって新たにつくり出す術語のことを「ネーミング術語」とよぶ。

「文学読解観点論」(「読みの術語」)の方法によって中学3年生に「鼓くらべ」のレポートを課してみた。その結果、多様な、個性あふれる観点をとらえてきたので紹介したい。

じつは、このレポートを課した動機は次のようなことであった。

本校では校内合唱コンクールをひかえていた。また、わたしは吹奏楽部の顧問も担当しているが、吹奏楽の県コンクールもひかえていた。それで、わたしのまわりの生徒の中にやたら賞にこだわる者がいた。わたしはこの「鼓くらべ」の老人のこぼれのように、音楽は争うものではないという信念をもっている。しかし、わたしが言うより、小説を通してそのことを知ってもらおうと、この「鼓くらべ」を読ませることを考えた。内容的なことを教訓として心にとめてほしいということが第1の動機であった。

第2の動機は、この学年は2年間「読みの術語」による小説の指導を行ってきたので、そろ

そろ、一方的な教え込みではなく、思いきって生徒みずから読解させる機会を与えてもいいのではないかと考えたことである。「読みの術語」の技能の定着度をみることができるともかもしれないという気持ちもあった。

ただ、この「鼓くらべ」は現行の教科書には掲載されてなく、持ち込み教材ということになる。何時間もとるわけにはいかない。そこで、音読に1時間、作業と質問に2時間、実際には2時間では無理があるが、あとは家庭学習の時間にゆだねる形になった。授業で用いた時間は合計3時間である。生徒にとっては宿題が増え、時間的に苦しい思いをさせたと思う。

結果は、思わぬ「鼓くらべ」における「読みの術語」の集大成になってしまった。

「鼓くらべ」における重要な「読みの術語」としては、《隠し構成》《伏線》《登場人物の重要なことば・教訓》《人物の変化・お留伊の考え方の変化》などがあげられるだろう。

*琉球大学教育学部(附属中学校)

ネーミングのおもしろさとしては《拈華微笑*》《会いたい時にあなたはいい構成*》《新世界への出発*》《走馬燈構成*》《白鳥麗子表現*》《極意を極められない師匠*》などがあげられる。

ここに掲載した生徒の「読みの術語」の集成をお読みいただき、生徒の柔軟な発想を味わっていただきたい。

凡 例

※ はじめに本文の該当部分を太字で掲げる。

次に、「読みの術語」名を太字で、〔生徒名〕を普通文字で掲げる。

3番目に、説明を述べている場合は普通文字で掲げる。

※ 配置は本文の叙述順に並べた。

※ 《 》は「読みの術語」名。

※ 「*」印がついた「読みの術語」はオリジナルだと思われるもの。つまり、「ネーミング術語」。

※ 〔 〕は案出した生徒（教師もある）の氏名。生徒名を明示したのは、それぞれのネーミングはそれぞれの生徒の知的財産として尊重したいからである。

まず、「前書き」を書いた生徒がいるので紹介したい。この生徒はワープロで打って提出してきた。

.....レポートを始めるに当たって.....
〔石川あゆみ〕

今まで、こんな数奇なレポートを提出する経験はなかった。レポートといえば、数学の誤答レポートであったり、はたまた理科の実験結果レポートであったり。国語のレポート提出なんて前代未聞であるから前例もないし、どうやればよいか解らない。

しかし、私は考えた。私たちが書くレポートが見本となり、例となればよい！ どんな風にレポートを書こうと、私の勝手である。自分の考えを全て文章に表しながら他人に伝える機会が与えられたのだ。チャンスを逃す手はないのである。

「読みの術語」の表し方は、これまでの授業

で大体理解しているし、自分で発見していくというのも、おもしろい。そしてこれが認められたりなんかしちゃったら、さらに嬉しいと思う。

パソコンで出すレポートは、多分これが初めてである。これからどんなレポートが出来上がるのか、自分でも予想はつかない所であるが、まあ、何事も経験だ！ とおもしろい、頑張ることにする。そして、さっさと終わらせて定期Ⅱの試験勉強に取り掛かるのだ！ さて、果たしてうまくいくのであろうか・・・一抹の不安を残したまま、レポートを進めることにする。

一

庭さきに暖かい小春日の光りが溢れていた。おおかたは枯れた籬の菊のなかにもう小さくしか咲けなくなった花が一輪だけ、茶色に縮れた枝葉のあいだから、あざやかに白い葩をつつましく覗かせていた。

《情景描写》〔多数〕

《情景移動描写*》〔大城 昇洋〕

映像の写し方がだんだん情景をしぼっていくことから。〔大城 昇洋〕

《ここは日本*》〔石川あゆみ〕

I think!

「菊」という花、それに「つつましい」といった部分で、いかにも日本らしさを表している。

〔石川あゆみ〕

《象徴》〔七尾 典子〕

お留伊をめぐる人々の中で老人だけが清らかな心をもっていることを“もう小さくしか咲けなくなった花が一輪だけ、茶色に縮れた枝葉のあいだから、あざやかに白い葩をつつましく覗かせていた。”とちらりと象徴している。

〔七尾 典子〕

《情景と主人公の姿の一致*》〔大城 昇洋〕

老人から見た主人公お留伊と一致する。お留伊も他の人を押し抜いて咲いている小さくしか咲かない花と同じ。〔大城 昇洋〕

《擬人法》〔多数〕

部分が擬人法。〔糸数〕

お留伊は小鼓を打っていた。

《じゃんじゃんじゃん！いきなりあらわれた

登場人物*〕〔新里 美和〕

今までは小春日のようすを描いていたのに、いきなり、お留伊は小鼓を打っていたと、登場人物があらわれた。〔新里 美和〕

《視点のうつりかわり》〔安里 友紀〕《視角の変化》〔糸数〕

《名前先行登場表現*》〔小橋川天馬〕

あまり珍しくはないが、登場人物がすぐ名で登場して、その後紹介すると、その人物が実在の人物のように見え、小説に入っていくやすい。〔小橋川天馬〕

町いちばんの絹問屋の娘で、年は十五になる。眼鼻だちはすぐれて美しいが、その美しさは澄み徹ったギヤマンの壺のように冷たく、勝ち気な、驕った心をそのまま描いたように見える。

《人物紹介*》〔多数〕

《わたしはこんな人よ*》〔新里 美和〕

いきなりあらわれた登場人物、お留伊について、年齢、目鼻だちだの、この人はこんな人だよと、実際にいなくても、文で読みとれる、想像できる効果をもっている。そして、読者に興味をもたせる力をもっている。

〔新里 美和〕

《変化前の主人公*》〔石川あゆみ〕

I think!

自分の鼓に対し、有り余る自信をもっている。

〔石川あゆみ〕

澄み徹ったギヤマンの壺のように

勝ち気な、驕った心をそのまま描いたように

《直喩》〔多数〕

……此処は母屋と七間の廊下でつながっている離れ屋で、広い庭のはずれに当たり、うしろを松林に囲まれていた。

《居場所描写*》〔多数〕

《現在位置描写*》〔新里 大輔〕

登場人物、お留伊の紹介をして、美しさを語っていたのに、いきなり入ってきて今の場所の説明をしている。話題の変化。

白い艶やかな頬から、眉のあたりまでぼっと上気しているが、双の眸は常よりも冴え

て烈しい光をおび、しめった朱い唇をひき結んで懸命に打っている姿は、美しいというよりは凄まじいものを感じさせるし、なにか眼に見えぬ力で引摺られているようにも思えた。

《容貌描写》〔多数〕

《迫力描写*》〔石川あゆみ〕

鼓の音は壁々と松林に反響した。微塵のゆるみもなく張り切った音色である。それは人の耳へ伝わるものでなくて、じかに骨髄へ徹する響きを持っていた。

《音の描写*》《音色描写*》〔多数〕

《ひきしめ描写*》〔七尾 典子〕

難しい漢字や古い言い回しを使って、文章がだらだらしないようにひきしめている。

〔七尾 典子〕

《鼓の音のすごさを説明している部分*》

〔新里 美和〕

お留伊の鼓の音のすごさを説明している。実際には聞こえないが読んで今にも聞こえてきそうな感じ。それほどすごい。〔新里 美和〕

《パワフル描写*》〔前田 真吾〕

《鼓の音による性格描写*》〔儀間 朝寛〕

この鼓の音の強烈さから、打っている人の性格がわかる。〔儀間 朝寛〕

……お留伊は肩から小鼓を下ろすと、静かに籬の方を見やって、

「そこにいるのは誰です」

と呼びかけた。……一輪だけ咲き残った菊の籬の蔭で誰か動く気配がした。そして間もなく、一人の老人がおずおずと重そうに身を起こした。

《運命の出会い描写*》〔末吉 亮子〕

ひどく痩せた体つきで、髪も眉毛も灰色をしている。身なりも貧しいし、殊に前躡みになって、不精らしく左手だけをふところにした恰好が、お留伊には忘れることの出来ないほど卑しいものを感じられた。

《人物紹介*》〔多数〕

《老人の容貌描写*》《伏線》〔多数〕

《第一印象*》〔新垣 英理〕

加賀国は能楽が旺んで、どんな地方へ行っ

ても謡^{うたい}の声や笛、鼓の音を聞くことが出来る。あえて裕福な人々ばかりでなく、その日ぐらしの貧しい階級でも、多少の嗜^{たしな}みを持たぬ者はないというくらいである。

《お国柄描写*》〔宮平 直木〕

《国内人々描写*》〔饒波 正規〕

《国内文化情勢描写*》〔糸数〕

「おまえ何処の者なの、二、三日まえにもそこへ来たようだね、なにをしに来るの」「申しわけないことでございます」

《言葉づかいによる人物の区別》

〔七尾 典子〕

《言葉づかいによる人物の立場》

〔糸数〕

「～は言った。」などと書かなくてもお留伊は「おまえ」などからわかるし、老人にはへりくだった礼儀正しさがある。〔七尾 典子〕

老人を「おまえ」と呼ぶのが、年上であるのに尊敬がない。老人→卑しい人。

また貧富の差が出ている。〔大城 昇洋〕

「おまえ津幡^{つばな}の者ではないの、そうですね。津幡の能登屋^{ののむね}から、なにか頼まれて来たのでしょうか」

「隠しても駄目^{だめ}、あたしは騙^{だま}されやしないから」

「ではどうして福井へ行かないの、どうしてこの森本でぐずぐずしているの」

「いつ頃から此処へ来はじめたのだえ」

「あたし二三日まえから気付いていました。でもまるで違うことを考えていたのよ」

《伏線》〔石川あゆみ〕

I think !

いきなり初対面の人にこういうとは、よほど前例があったと見える。〔石川あゆみ〕

その後で津幡のお宇多というライバルがいることが明らかになるから伏線。しかし、あまり重要な伏線ではない。〔糸数〕

《疑心暗鬼的構成*》〔比嘉 文彦〕

《言動からの人格推量*》〔宮城 健〕

勝ち気なわがままさが感じられる。

〔宮城 健〕

《ちらっと性格の表れ*》〔矢ヶ崎佳苗〕

やっぱりこの人は強気な人である。全く知らない人にこんなに強く言えるなんてすごい。(私はこんなことできない。)[矢ヶ崎佳苗]

《高飛車言葉*》〔安里 友紀〕

いや!

《一言の心情*》〔小橋川天馬〕

この「いや!」という老人の一言は、自分に対する自制の念や、何かに対する強烈な拒絶とみることができ、この一言で老人の心情を読みとることができる。〔小橋川天馬〕

こんな話はなんの興もございません。本当になんの興もございません……。

《反復法》〔多数〕

「わたしは旅の者でございます」

「隠しても駄目、あたしは騙されやしないから」

「わたくしは旅の者でございます」

《反復法》〔多数〕

老人は鄭重^{ていじゆう}に礼を述べ、やはり左手をふところ手にしたまま静かに立ち去った。

《伏線》〔多数〕

《あやしげ構成*》〔前田 真吾〕

老人が、自分で左手を折った観世市之丞であることを暗示している。〔糸数〕

二

それからその翌日も……お留伊は次第にその老人に親しさを感じはじめた。そして色々と話しあうようになった。老人は口数の寡^{すくな}い、どちらかという話し下手であったが、それでも少しずつは身の上が分かった。

《関係の発展*》〔石川あゆみ〕

《登場人物の和み表現*》〔池村美乃里〕

最初はあんなに警戒していたお留伊だがもう友だちのようになっている。〔池村美乃里〕

老人は名もない絵師^{えし}だと云った

《しふい表現*》〔伊佐 和朋〕

普通の人ならば、「なぜ、この老人は自分の正体を明かし、彼自身が英雄になろうとしないのか。」と思うはずである。ここが、この小説をおもしろく、興味深くする技法である。しか

し、この老人はとにかくしぶい!

老人は名もない絵師だと云った、そして僅かな絵の具と筆を持って、旅から旅を渡り歩き困難な生活を過ごしてきたという。苦しかったこと、悲しく辛かったこと、お留伊には縁の遠い世間の、泪と溜息とに満ちた数々の話をしながら、けれど老人の声音にはいつも温雅な感じが溢れていた。

《身の上描写*》《身の上話*》〔多数〕

《仮の姿描写*》〔多数〕

《老人の人生・声音による人物描写*》

〔宮城 健〕

けれど老人の声音にはいつも温雅な感じが溢れていた。

《育ちの表れ*》〔七尾 典子〕

《人格の表れ*》〔糸数〕

「そうです、わたしはずいぶん世間を見て来ました。なかには万人に一人も経験することのないような、恐ろしいことも味わいました。そして世の中に起こる多くの苦しみや悲しみは人と人とが憎みあったり、嫉みあったり、自分の欲に負かされたりするところから来るのだということを知りました。……わたしにはいま、色々なことがはっきりと分かります。命はそう長いものではございません。すべてが瞬くうちに過ぎ去ってしまいます、人はもっと譲り合わなくてははいけません、もっともって慈悲を持ち合わなくてははいけないのです」

《登場人物の言葉》《教訓*》《伏線》〔多数〕

老人の経験から出た人生訓ともいえる内容のあることば。「万人に一人も経験することのないような、恐ろしいこと」とは、「友割りの鼓」の一件を暗示しているので《伏線》といえる。

〔糸数〕

《人生の先輩》〔石川あゆみ〕

《人生における助言描写*》〔宮平 直木〕

〔糸数 祐〕

《人生の真実*》〔豊里 美生〕

《人間の真実*》〔新垣 涼子〕

《悟り》〔七尾 典子〕

老人の言葉は静かで、少しも押しつけが

ましい響きを持っていなかった。それでこういう風な話を聞いたあとでは、ふしぎにお留伊は心が温かく和やかになるのを感じた。

《老人の偉大さ、お留伊に対する影響*》

〔砂辺千寿子〕

《感化*》〔多数〕

《感化していく人物描写*》〔宮城 健〕

「いつか能登屋がどうしたとか仰有っていましたが」

《時間引き戻し構成*》《前にも言った事を繰り返して言ってる構成*》〔安里 友紀〕

新年の嘉例として、領主在国のときには金沢の城中で観能がある。そのあとで民間から鼓の上手を集め、御前でくらべ打ちを催して、ぬきんでた者には賞が与えられる、……今年もまたそれが間近に迫っているので、賞を得ようとする人々は懸命に技を磨いていた。

《解説構成*》〔煤孫 潤子〕

《あらし構成*》《概要構成*》〔糸数〕

お留伊は幼い頃からすぐれた腕を持っていたので、教えに通って来る師匠の観世仁衛門は、これまでに幾度もお城へ上ることを勧めていた。けれども勝ち気なお留伊は、御前へ出て失敗したときのことを考え、もう少しもう少しと延ばしてきたのである。……能登屋のお宇多という娘は十六歳で、もう二度もお城へ上がっているが、まだ賞を与えられたことはいちどもなかった。

そのうえこんどはいよいよお留伊が上るといので、それとなく人を寄越してはこちらの様子を探るのであった。

《……の話題変更用法*》〔與那城 武〕

《ライバル構成*》〔糸数 祐〕

《火花構成*》〔新里 大輔〕

《性格描写*》〔山畑るみ子〕

「そうでございますか」

老人は納得がいったようにうなずいた。

「……それでわたくしを、能登屋から探りに来た者と思し召したのでございますな」

《……の時間経過用法*》〔與那城 武〕

……を用いたことで、しばらく間があったことを示す。

「でも同じようなことが何度もあったのだもの」

《あら、私にも言い分があるわよ構成*》

〔安里 友紀〕

「わたしはすっかり忘れておりました」

老人は遠くを見るようにして云った。

「……鼓くらべはもうお取止めになったかと思っていたのです」

「どうしてそう思ったの」

老人は答えなかった。……そして、どこか遠くを見るような眼つきをしながら、ふところ手をしている左の肩を、そっと揺りあげた。

《伏線》〔多数〕

I think !

老人は、かつて自分がしたことを思い出し、過去を悔い、自分の過ちの象徴である左手を揺すり、罪を噛みしめていたのだと思う。

〔石川あゆみ〕

《回想の動作*》〔大城 昇洋〕

自然に、あの頃の、あの時の鼓を打つ感覚を思い出している。〔大城 昇洋〕

《老人の過去の暗示*》〔伊佐 和朋〕

線の部分が、老人の過去を表しているかのようである。これらの表現から、老人は、過去に、鼓くらべに関しての何かがあることをうっすらと暗示しているようである。

〔伊佐 和朋〕

《意味ありげ構成*》〔末吉 亮子〕

〔長嶺 香苗〕

忘れるはずがない。うそつきである。〔末吉 亮子〕

《何かかくしているぞ構成*》〔上原 秀美〕

それから二日ほどすると、急にお留伊は金沢へ行くことになった。

～
その稽古は二十日ほどかかった。

～
森本へ帰ったのは十二月の押し迫った頃

であった。

《ひきしめ構成*》〔七尾 典子〕

話の本筋から関係ないところや、ただ少しはさわっておかなければいけない所は、簡単にまとめて、だらだらしないようにしている。

〔七尾 典子〕

《時間とび構成*》〔池村美乃里〕

《TIME TIME 構成*》〔國仲理紗子〕

森本へ帰ったのは十二月の押し迫った頃であった。——あの老絵師はどうしているのだろう。家へ帰って、なによりも先に考えたのはそのことだった。

《あの人気が気になってる構成*》

〔具志堅美樹〕

老人のことが気になって、どこにいるのか考えている。

《心のかたむき*》〔安里 友紀〕

《親しみ感じたら気になり出す状態*》

〔大串 美央〕

森本へ帰ったのは十二月の押し迫った頃であった。——あの老絵師はどうしているだろう。家へ帰って、なによりも先に考えたのはそのことだった。……まだこの町にいるだろうか、それとも故郷の福井へもう立っていったか。もしまだいるとすれば、自分の鼓を聴きに来るに違いない。お留伊はそう思いながら、残っている僅かの日を、一日も怠らず離れ屋で鼓の稽古に暮らしていた。

《老人が気になるが稽古もしなくちゃ*》

〔上原 秀美〕

けれど老人の姿は見えなかった。

すでに雪の季節に入っていた。重たく空にひろがった雲は今やまったく動かなくなり、毎日こまかい雪がちらちらと絶えず降ったり歇んだりした。……はじめのうちはたまたま射しかける陽のぬくみにも溶けた雪が、家の陰に残り、垣の根に残りして次第にその翼をひろげ、やがてかたく凍てて今年の根雪となった。

《暗示》《前兆》《隠喩》〔多数〕

老人に対する不安→重たく空にひろがった雲。

〔與那城 武〕

「重たく空にひろがった雲」や「絶えず降りたり歌んだり」や「かたく凍てて」等の表現が、姿を見せない老人の安否を気づかわせる効果を高める。~~~~~線部分は隠喩。〔糸数〕

《嵐の前の静けさ構成*》〔宮城 匡寿〕

《情景と老人の境遇との一致*》

〔伊佐 和朋〕

老人の病気は重い。そして、季節は冬。しかも重たい感じがあり、どんよりしている。これは、老人の境遇と情景の一致である。

〔伊佐 和朋〕

《情景描写による時間の経過*》

〔砂辺千寿子〕

《代代表現*》〔小橋川天馬〕

「冬」と言わずに「雪の季節」としており、時代めいたものを感じさせる。〔小橋川天馬〕

おおつごもりの明日に迫った日である。

お留伊が鼓を打っていると、庭の小柴垣のところへ、雪囊ゆきふくろに笠をつけた人影が近寄ってきた。

《期待描写*》〔末吉 亮子〕

まあ、やっぱりまだいたのね。

《懐かしさ・安心・プライド*》

〔石川あゆみ〕

I think!

老人に対しての懐かしさ、まだいてくれたという安心感、自分の鼓を聴きたくてこんなに寒い中やってきたのだと思いたいプライドが入り交じった感情。〔石川あゆみ〕

おおつごもりの明日に迫った日である。

お留伊が鼓を打っていると、庭の小柴垣のところへ、雪囊ゆきふくろに笠をつけた人影が近寄ってきた。

まあ、やっぱりまだいたのね。

お留伊はあの老人だと思って、鼓をやめて縁先まで立っていった。……けれどそれはあの老人ではなく、まだ十二三の見慣れぬ少女であった。

《意表をつく構成*》《緊張感up効果*》

〔七尾 典子〕

お留伊にも（読者にも）“——まあ、やっ

ぱりまだいたのね。”と思わせていながら、裏切って逆に緊張感を高めている。

三

普通の場合なら、いくら相手があの老人であっても、そんなところへ出掛けて行くお留伊ではなかった。けれど……老人はいま重い病床にあるという、そして死ぬまえにいちど自分の鼓を聴きたいという、その二つのことがお留伊の心を動かした。

《心が動かされました構成*》〔比嘉 玄史〕

「いいわ、行ってあげましょう」

彼女は冷ややかに云った。

《世間の目*》〔大城 昇洋〕

世間での立場関係がからんでいる。ずっと会いたかったのに、その考えが先に出て、老人にしか本当の気持ちを表せないさびしさがある。

〔大城 昇洋〕

《人格の表現*》〔小橋川天馬〕

すでに気心の知れたなかの人が死にそうなのに、冷ややかにということに、お留伊の少し冷めた人格をうかがうことができる。

〔小橋川天馬〕

松葉屋というのは宿はずれにある汚い木賃宿むかしのであった。老人はひと間だけ離れている裏の、狭い煤けた部屋ばいに寝ていた。

《境遇描写*》〔多数〕

《居場所描写*》〔多数〕

《老人の経済状態*》〔比嘉 文彦〕

《ひそかにケチつけてまっせー、わたしはみがさない言葉*》〔新里 美和〕

金持ちのお御嬢にはよくわからないこと。

〔新里 美和〕

お留伊はただ微笑で答えた。……自分の打つ鼓に、この老人がそんなにも大きなよろこびを感じている、そう思うとふしぎに、金沢で大師匠おほし匠に褒められたよりも強い自信と、誇らしい気持ちが湧きあがってきた。

《お留伊の芸術家としての勘*》

〔石川あゆみ〕

金沢の大師匠よりも老人のほうが芸術性が高いことを屈辱でなく感覚でとらえている。

〔糸数〕

《実はただ者ではない構成*》〔保坂南海恵〕

老人はただ者ではない、何かすごさをもって
いる。〔保坂南海恵〕

《確信・気持ちの高まり*》〔宮城 健〕

何よりも老人を慕い、はげましになっている。

〔宮城 健〕

十余年まえに、観世市之丞と六郎兵衛と
いう二人の囃子方があって、小鼓を打たせ
ては龍虎と呼ばれていたが、二人とも負け
嫌いな烈しい性質で、常づね互いに相手を
凌ごうとせり合っていた。……それが或年
の正月、領主前田侯の御前で鼓くらべをし
た。どちらにとっても一代の名を争う勝負
だったが、殊に市之丞の意気は凄まじく、
曲なかばに到るや、精根を尽くして打ち込
む気合いで、遂に相手の六郎兵衛の鼓を割
らせてしまった。

打ち込む気合いだけで、相手の打っている
鼓の皮を割ったのである。一座はその神
技に驚嘆して、「友割りの鼓」といまに語
り伝えている。

《説明》〔多数〕

《過去語り*》〔上間 真紀〕

《語り伝え*》〔大城 孝江〕

《解説構成*》〔煤孫 潤子〕

《伝説構成*》《エピソード》〔糸数〕

「友割りの鼓」といまに語り伝えている。

《ネーミング》〔仲村 和人〕

「そうかも知れません、本当にそうかも
知れません」

《反復法》〔多数〕

老人は息を休めてから云った。

《告白の準備*》〔安里 友紀〕

……市之丞はある夜自分で、鼓を持つ方
の腕を折り、生きている限り鼓は持たぬと
誓って、何処ともなく去ったと申します。

《なぜあなたがそこまで知ってるの表現*》

〔山川 慶〕

なぜそこまで詳しいのか。

《伏線》〔山川 慶〕

……わたしはその話を聞いたときにこ

う思いました。すべて芸術は人の心をたの
しませ、清くし、高めるために役立つべき
もので、そのために誰かを負かそうとし
たり、人を押し退けて自分だけの欲を満足
させたりする道具にすべきではない。鼓を打
つにも、絵を描くにも、清浄な温かい心か
ない限りなんの値打ちもない。……お嬢さ
ま、あなたはすぐれた鼓の打ち手だと存じ
ます、お城の鼓くらべなどにお上がりなさ
らずとも、そのお手並みは立派なものでご
ざいます。おやめなさいまし、人と優劣を
争うことなどはおやめなさいまし、音楽は
もっと美しいものでございます、人の世で
最も美しいものでございます。

《登場人物の言葉*》《教訓*》〔多数〕

《音楽の美しさの教え*》〔保坂南海恵〕

《眠りの床に就く寸前遺言*》〔保坂南海恵〕

「もうこれが聴き納めになるかも知れませ
ん。失礼ですが寝たままで御免を蒙ります」

《予感構成*》〔米須 清乃〕

四

お留伊は控えの座から、その御簾の奥を
すかし見しながら、幾度も総身の顫えるよ
うな感動を覚えた。……然しそれは気臆れ
がしたのではない。楽殿の舞台でつぎつぎ
に披露される鼓くらべは、まだどの一つも
彼女を懼れさせるほどのものがなかった。
彼女の勝ち確実である。そしてあの御簾
の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿
を拝んだこともない大守の手で、一番の賞
を受けるときの自分を考えると、その誇ら
しさと名誉の輝かしさに身が顫えるのであ
った。

《自信の現れ*》〔新垣 卓弥〕

《自信過剰な心*》〔石川 あゆみ〕

《おごり高ぶる心境*》〔宮城 健〕

《思いこみが激しいぞ構成*》〔砂川 龍馬〕

《自想描写*》〔宮平 直木〕《仮想描写*》

〔糸数〕

彼女の勝ち確実である。そしてあの御
簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから

姿を拝んだこともない大守の手で、一番の賞を受けるときの自分を考えると、その誇らしさと名譽の輝かしさに身が顫えるのであった。

《一体感の表現*》〔七尾 典子〕

三人称で書かれているのがこの小説の特徴であるが、この文のように主語がなかったり、“自分”などを使っていて、この辺りはト書きとお留伊の感情・行動が一体となっている。

〔七尾 典子〕

《第三者が言っていることと自分の心の中が混同している表現*》〔安原 亜湖〕

《視点の揺れ》〔糸数〕

「落ち着いてやるのですよ」

師匠の仁右衛門は自分の方でおろおろしながら繰り返して云った。「……御簾の方を見てないで、いつも稽古するときと同じ気持ちでやりなさい。大丈夫、大丈夫きっと勝ちますから」

お留伊は静かに微笑しながらうなずいた。

《逆の立場構成*》〔豊里 美生〕

ふつう、お留伊のほうが緊張するはずなのに師匠のほうがおろおろしていて落ちつきがない。その反面、お留伊は自信たっぷりですらにリラックスしている。

そして曲がはじまった。

《嵐のはじまり構成*》〔池村美乃里〕

今から何か起こりそうな感じ。お留伊が妙に自信をもっているから。

お留伊は自信を以て打った、鼓はその自信によく応えてくれた。

《擬人法》〔多数〕

お宇多の顔は蒼白め、その唇はひきつるように片方へ歪んでいた。それは、どうかして勝とうとする心をそのまま絵にしたような、烈しい執念の相であった。

《お宇多の容貌描写》〔多数〕

《表情描写》〔伊禮 海香〕

《昔の自分を見てるよう*》〔山城 咲乃〕

《象徴》〔七尾 典子〕

《教訓の逆説*》〔小橋川天馬〕

《引き金*》〔山里 杉明〕

老人が悟り、お留伊に語り、言いきかせたことを心に留めないとういうことになるかとういうことを象徴している。〔七尾 典子〕

先ほどの教訓を守らない結果をみる事ができる、お留伊にはそれが逆に教訓となっている。

〔小橋川天馬〕

お留伊が老人の言葉を理解することへの引き金になっている。〔山里 杉明〕

その時である、お留伊の脳裡にあの旅絵師の姿がうかびあがってきた、殊に、いつもふところから出したことのない左の腕が！
——あの方は観世市之丞さまだった。

お留伊は愕然として、夢から醒めたように思った。

老人は、市之丞が鼓くらべに勝ったあとで自分の腕を折り、それも鼓を持つ方の腕を、自ら折って行衛をくらましたと云ったではないか。……いつもふところへ隠している腕が、それだ。——市之丞さまだ、それに違いない。

そう思うあとから、眼のまえに老人の顔があざやかな幻となって描きだされた、それからあの温雅な声が、耳許ではっきりこう囁くのを聞いた。……音楽はもっと美しいものでございます。お留伊は振り返った。そして其処に、お宇多の懸命な顔を見つけた。眸のうわずった、すでに血の気を喪った唇を片方へひき歪めている顔を。

——音楽はもっと美しいものでございます。またと優劣を争うことなどおやめなさいまし、音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえてきた。……お留伊の右手がはたと止まった。

《クライマックス》《ピナクル》《伏線の現れ*》〔多数〕

線部分がピナクル。〔多数〕

ピナクルを「——あの方は観世市之丞さまだった。」とすることと「……お留伊の右手がはたと止まった。」とすることの二つが考えられる。《隠し構成*》を重視すると前者、「音楽は美しいものでございます。」という主題を重視すると後者ということになるだろう。ここでは、

限定しないことにする。二つともピナクルの要素があるものとする。〔糸数〕

「真の序」という曲の中で、お留伊は「真に」気づいた。〈與那城 武〉

——市之丞さまだ、それに違いない。

《断定*》〔安里 友紀〕

そう思うあとから、眼のまえに老人の顔があざやかな幻となって描きだされた、それからあの温雅な声が耳許ではっきりこう囁くのを聞いた。……音楽はもっと美しいものでございます。お留伊は振り返った。そして其処に、お宇多の懸命な顔を見つけた。眸のうわずった、すでに血の気を喪った唇を片方へひき歪めている顔を。

——音楽はもっと美しいものでございます。またと優劣を争うことなどおやめなさいまし、音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえってきた。……お留伊の右手がはたと止まった。

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聴きながら、鼓をおろしてじっと眼をつむった。老人の顔が笑いかけられるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れてきた。そして自分の体が眼に見えぬいましめを解かれて、柔らかい青草の茂っている広い広い野原へでも開放されたような、軽い活々とした気持ちでいっぱいになった。

《走馬燈構成*》〔宮城 健〕

それからあの温雅な声が、耳許ではっきりこう囁くのを聞いた。……音楽はもっと美しいものでございます。

《幻覚描写*》〔島袋 希幸〕

《脳裏（心・夢）構成*》〔煤孫 潤子〕

——音楽はもっと美しいものでございます。またと優劣を争うことなどおやめなさいまし、音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえってきた。

《心の声描写*》〔安里 志乃〕

《前文引用*》〔大森 綾子〕

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聴きながら、鼓をおろしてじっと眼をつむった。

《すごい行動描写*》〔島袋 希幸〕

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聴きながら、鼓をおろしてじっと眼をつむった。老人の顔が笑いかけられるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れてきた。そして自分の体が眼に見えぬいましめを解かれて、柔らかい青草の茂っている広い広い野原へでも解放されたような、軽い活々とした気持ちでいっぱいになった。

《新世界への出発*》〔石川あゆみ〕

《解放感構成*》〔末吉 亮子〕

《目覚め構成*》〔國仲理紗子〕

《よろこび表現*》〔土屋 春佳〕

《感動、野原でうれしさいっぱい表現*》

〔山川 慶〕

《スローモーションのような構成*》

〔米須 清乃〕

《感化・改心*》〔宮城 健〕

老人の言葉とお留伊とお宇多の姿の一致で、お留伊は老人の言葉から自分の姿を見つめることがやっとできた。

この幻想的な部分。スローモーションやぼかしなどで、よくテレビドラマや映画などでも登場するこのようなシーンになにかふさわしいネーミングはないかと思っていた。〔糸数〕

《愕然の舞*》〔大城 昇洋〕

——早く帰って、あの方に鼓を打ってあげよう、この気持ちを話したら、きっとあの方はよろこんで下さるに違いないわ。

《やさしさ表現*》〔土屋 春佳〕

《心はうわの空表現*》〔新垣 英理〕

《呼称の変化》〔新垣智恵美〕

「わたくし打ち違えましたの」
お留伊は微笑しながら云った。

《行動の変化》〔山川 慶〕

以前だと冷やかな態度だったが、微笑しながら云ったという違いは、老人に教えられたことを悟ったから。

《白鳥麗子表現*》〔大屋 梨夏〕

舞台から下りて控えの座へ戻ると、師匠はすっかり取り乱した様子で話した。

(中略)

「あなたは打ち違えはしなかった、あなたは」仁右衛門は籠気となって同じことを何十回となく繰り返した。

《極意を極められない師匠*》

〔石川あゆみ〕

《わかってないな構成*》〔土屋 春佳〕

《今までの私はなんだったの表現*》

〔山城 咲乃〕

《象徴》〔七尾 典子〕

お宇多と同じく、音楽の美しさ、本当の意味を知らず、勝敗こそがすべてと考えていることの象徴。〔七尾 典子〕

* * *

《「*」構成*》〔宮里日出丈〕

今まで「一」～「四」と場面が分けられていたが、突然「*」になっている。

〔宮里日出丈〕

《エピローグ構成*》〔煤孫 潤子〕

「*」の後は、クライマックスが終わり、あとがきみたいなもの。〔煤孫 潤子〕

誰が賞を貰ったかということももう興味がなかった、ただ少しも早く帰って老人に会いたかった。

《心の恩人、真の師匠*》〔多数〕

《生まれ変わり構成*》〔新里 希望〕

……そして直ぐ、訊かれることは分かっているという風に、

「あのお客さまは亡くなりました」

とあたりまえ過ぎる口調で云った。

《悲しさを強調する表現*》〔原原 亜湖〕

《松葉屋の宿屋のレベルがわかる表現*》

〔米須 清乃〕

貧乏な人たちが泊まるので、亡くなる人も多

いのだろう。〔糸数〕

老人は北枕に寝かされ、逆さにした枕屏風と、貧しい櫛の壺と、細い線香の煙にまもられていた。

《擬人法》〔多数〕

《さみしい部屋*》〔井上 美美〕

困難な長い旅が終わって、老人はいまやすらかな、眼覚めることのない眠りの床に就いているのだ。

《遠回し表現》〔山川 慶〕

「死んだ」と言わないで、遠回しに表現している。

——ようなさいました。

お留伊には老人の死顔が、そう云って微笑するように思えた。

——さあ、わたくしにあなたのお手並みを聴かせて下さいまし。

《拈華微笑*》〔煤孫 潤子〕

《死に顔の微笑*》〔豊里 美生〕

《架空のこぼし*》《直喩》〔石川あゆみ〕

《テレパシー構成*》〔新垣 涼子〕

《幻覚表現*》《幻聴表現*》〔新垣 英理〕

そこにはもういないけれど、その人の言おうとしていたことが、テレパシーか何かで残したようにお留伊だけに聞こえる。〔新垣 涼子〕
笑うわけがないのにそう見えてしまうように思える。聞こえるわけがないのに聞こえるように思える。〔新垣 英理〕

「わたくしお教えて眼が明きましたの」

お留伊は囁くように云った。「……それで色々なことが分かりましたわ、今日まで自分がどんなに醜い心を持っていたか、どんなに思いあがった、嗜みのない娘であったか、ようやくそれが分かりましたわ、それで急いで帰ってきましたの、おめにかかって褒めて頂きましたものですから」

《心情の変化》《考え方の変化》〔多数〕

《決意描写*》〔大森 綾子〕

《感化*》〔池村美乃里〕

《心を入れかえ構成*》〔保坂南海恵〕

《お留伊の自己反省*》〔新里 美和〕

老人が亡くなってはじめて老人の困難な長い

旅、最後のせりふを理解した。そして、自分の醜さを感じ、反省している。老人の最後のせりふはお留伊にとってのはじめて自分の姿に気づく大切な遺言となってしまった。

〔新垣 美和〕

《主題を悟った人物描写*》〔伊佐 和朋〕

老人のできなかったこと、老人の最後の思いを受けたお留伊は、これから鼓で人を傷つけるようなことはしない。むしろ、人の心をたのしませ、清くし、高めるために役立てようと努力するのでしょう。〔伊佐 和朋〕

お留伊の頬にはじめて温かいものが滴った。それから長いあいだ、袂で顔を蔽いながら声を忍ばせて泣いた。……長いあいだ泣いた。

《お留伊の悲しみ*》〔保坂南海恵〕

お留伊の頬にはじめて温かいものが滴った。

《隠喩》〔山里 杉明〕

温かいもの=涙〔山里 杉明〕

《生まれ変わり表現*》〔新垣 英理〕

これまでは血も涙もないようなやつだったけど、あたたかい性格になったので《生まれ変わり表現》。〔新垣 英理〕

「……今までのようではなく、生まれ変わった気持ちで打ちます、どうぞお聴き下さいまし、お師匠さま」

《老人の呼び方変更*》〔宮里日出丈〕

最後に老人のことを「お師匠さま」と呼んでいる。〔宮里日出丈〕

《心の奥描写*》〔大森 綾子〕

……南側の煤けた障子に仄かな黄昏の光が残っていて、それが彼女の美しい横顔の線を、暗い部屋のなかに幻の如く描きだした。

《ファイナル*》〔山城 咲乃〕

映画ならここで出演者や主題歌が流れるだろう。

「いやあ——」

こうして、鼓は、よく澄んだ、荘厳でさえある音色を部屋いっぱいに反響させた。……お留伊は「男舞」の曲を打ちはじめた。

《別れの鼓*》〔宮城 健〕

《演奏変化描写*》〔山川 慶〕

はじめにやった演奏に比べて、心がこもっている。〔山川 慶〕

《音楽に対する気持ちの変化*》〔新垣 涼子〕

最初の「男舞」は、ただ練習のために鼓を打っているだけだったけど、最後の「男舞」は、音楽（芸術）の意味が分かり、今までにない新しい気持ちで打っている。〔新垣 涼子〕

全体から

お留伊は幼い頃からすぐれた腕を持っていたので、教えに通って来る師匠の観世仁右衛門は、～

それとなく人を寄越してはこちらの様子を探るのであった。

十年余まえに、観世市之丞と六郎兵衛という二人の囃子方があって、

～

一座はその神技に驚嘆して、「友割りの鼓」といまに語り伝えている。

《ナレーション構成*》〔山里 杉明〕

全体を通して、登場人物以外に第三者がいて、状況を説明している。

（1頁を例に考えてみると）

籬、葩、驕る、藝々と、微塵などの難語彙の使用。

お留伊、加賀国、絹問屋という人名、地名、職業名。

《言葉・漢字・名前などの特徴によって時代背景がわかる*》〔與那城 武〕

現在使わないようなむかしの言葉を使っている。

《時代劇言葉*》〔長嶺 香苗〕〔新垣 涼子〕

老人とお留伊の出会いと別れのときの曲が「男舞」だった。〔煤孫 潤子〕

《初めと終わりの一致》〔煤孫 潤子〕

老人は「男舞」を聞いてお留伊の曲に関心を

もつ。つまり、老人とお留伊は「男舞」で出会った。そして、最後にお留伊が老人に弾いた曲も「男舞」だったが、その二つの曲はまるで違う雰囲気をもっている。まず、お留伊自身が、前者は勝負を気にしていたが、後者は本当の音楽に気づいたお留伊である。〔與那城 武〕

《出会いと別れとの曲の一部一致*》

〔與那城 武〕

いい家のお嬢さんということ。「～でございますわ」とか「～しましたの」などという語尾で表現している。

《言葉づかいで身分がわかる*》

〔新垣 英理〕

「おまえ何処の者なの、二三日まえにもそこへ来たようだね、なにをしに来るの」

「もうそのことはいいの、それから庭の外なら構わないから、いつでも聴きにおいで」

→ 老人の言葉、教訓

「別にむずかしい訳ではないのだけれど、お正月に金沢のお城で鼓くらべがあるの、それでこの近郊からは能登屋のお宇多という人とあたしと、二人がお城へ上がることになったんです」

→ 老人の言葉、教訓、クライマックス

「……それで色んなことが分かりましたわ、今日まで自分がどんなに醜い心を持っていたか、どんなに思いあがった、嗜みのない娘であったか、ようやくそれが分かりましたわ、それで急いで帰ってきましたの、おめにかかって褒めて頂きたかったものですから」

《お留伊の老人に対する言葉づかいの変化*》

〔與那城 武〕〔大城 昇洋〕

老人の言葉、教訓を境に、お留伊の言葉づかいが変化している。〔與那城 武〕

白い艶やかな頬から、眉のあたりまでぼっと上気しているが、双の眸は常よりも冴えて烈しい光をおび、しめった朱い唇をひき結んで懸命に打っている姿は、美しいと

いうよりは凄まじいものを感じさせるし、なにか眼に見えぬ力で引摺られているようにも思えた。

～

お留伊は愕然として、夢から醒めたように思った。

～

部屋はもう暗かった。……取り寄せた火で鼓の皮を温めたお留伊は、老人の枕辺に端座して、心をしずめるように暫く眼を閉じていた。……南側の煤けた障子に仄かな黄昏の光が残っていて、それが彼女の美しい横顔の線を、暗い部屋のなかに幻の如く描きだした。

「いやあ——」

こうして、鼓は、よく澄んだ、荘厳でさえある音色を部屋いっぱい反響させた。

《人物の変化》〔七尾 典子〕

お宇多

眸のうわずった、すでに血の気を衰った唇を片方へひき歪めている顔を。

お留伊

「わたくし打ち違えましたの」お留伊は微笑しながら云った。

老人

音楽はもっと美しいものでございます、仁右衛門

「……あなたは打ち違えなかった、そんな馬鹿なことはない」

お宇多と仁衛門は同じ考え。お留伊と老人も同じ考え。

《典型人物》〔池村美乃里〕

《対照人物》〔宮平 直木〕〔煤孫 潤子〕

お留伊とお宇多は対照人物。〔宮平 直木〕

老人と師匠は対照人物。〔煤孫 潤子〕

宿屋の娘と大師匠

《端役》〔新里 希望〕

旅の老絵師が、じつはかつての観世市丞であることを隠しておいて、鼓くらべの場面で明らかになる構成がとれている。

《隠し構成*》〔多数〕

結末で、お留伊が老人の言葉を理解して感動して、うれしくて会いにいくと彼は死んでいて話すことができなかった。

テレビドラマの「裸の大將」でもよく用いられる。結末で主人公はいつのまにか消えている。

《会いたい時にあなたはいない構成*》

〔山川 慶〕

前書きを書いた石川あゆみさんが、後書きも書いているので、それを紹介して結びとしたい。

・・・レポートを終えて・・・〔石川あゆみ〕

疲れた……。前で述べた通りに計画が進まなかったのだ。そして、終わった今！ 計画実行ほど難しいものはないとつくづく実感に耐えない。全く……こんなに考えながら読み物を読んだのは初めてである。さっき読み返したのだが、まだ、書けなかった部分がたくさんあった。たとえば、「遠くから姿を拝んだことのない大守

と「身近な大師匠・観世市之丞」との対比とか、お宇多と六郎兵衛と市之丞の共通点などなど、深く読めば読むほど味が出てくる。しかし、この作者の作風なのであろうか「隠し構成」。怠慢ではと思いましたが、作風と怠慢した作品作りとの関係は今後、ゆっくりかんがえていくことにする。なにはともあれ、おわたったのだ！ おわたったのだ！ おわたったのだ！ なんていい響きなのであろうか。さて、定期Ⅱも終了し、あとは合唱コンクールと吹奏楽コンクールである。全力投球でいきたいと思う。時々へばるかもしれないが、声援をいまのうちをお願いして、このレポートを終了する。

テキスト

『松風の門』（山本周五郎、新潮文庫、昭和55年10月25日14刷）

実施年月日 1993年7月

対 象 琉球大学教育学部附属中学校3年生